



TITLE:

静脩 Vol. 3 No. 4 (1966.10) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 3 No. 4 (1966.10) [全文]. 静脩 1966, 3(4)

ISSUE DATE:

1966-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65915>

RIGHT:

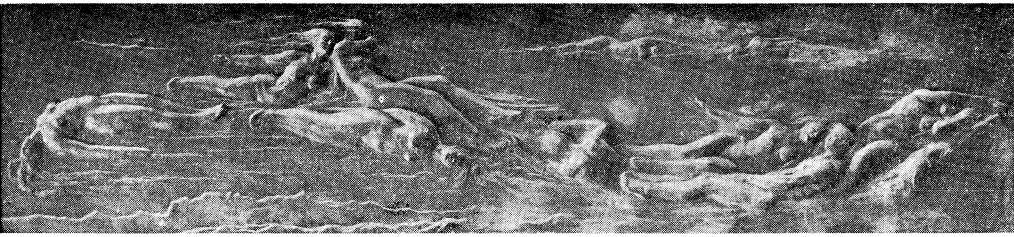


図 書 館 の 将 来

西 山 卯 三

現代は「高度成長」の時代、何でもドンドン成長する。成長しないものは死んでも当然、だめだという時代になってきた。大学も御覧の通り、ドンドン大きくなり、昔と同じキャンパスの中でそれをおさめこもうとするものだから、年中工事現場になってゴッタがえし、静かでノンビリしていた構内は高層建築がたてつまり、段々スラム化(?)している。昔は一度つくったら、災害さえなければ永久に生命があると思われていた「建築」も、いまは寿命のみじかい消耗品になりつつある。

ところが、建築が成長する生活の容器であるといった考え方が生れてくる前に、いつも「成長」のことを考えておかねばならぬといわれた建築がある。それが図書館の書庫である。図書館を計画する場合は、必ず蔵書が将来ふえることを考えて、書庫の建てましのできるような敷地・構造・配置にしておかなければならないと我々は40年も前の学生時代に教えられた。とはいうものの、当時考えられていた蔵書のふえ方は、現在我々が経験し、あるいは将来直面するであろうものとくらべると、全くお話にならぬ幼稚なものだった。今、世界は文献や情報の洪水におしながされそうな時代になりつつある。

本を買う金がなかった学生時代に、私は一つの本を買うのにも何日か、何カ月か考えた。卒業する時も4段組みの本棚に充分入る程度しか本がなかった。しかし今は、油断をしているとみるみるうづ高くつもっていく。一時、本を買うことをやめたが、あとで「あの時の…」と思い出しても手に入れることの出来ない場合があるので、やっぱり関係のありそうなものをその時買っておく。すると大変なことになる。今年に入ってからナヤを改造して奥行1間半、両側本棚の書庫をつくったので少し余裕ができたが、研究室の方はヘヤの半分をつぶしてつくりつけた書棚がもう一ぱいである。そして机の上は次々に来る雑誌・資料・書籍で積み重なり、いささか資料恐怖症におそわれている。ふえ方が急で、整理がおっつかず、火急の時に雑誌のバックナンバーをみようとする、結局教室の図書館のを借出すことになったりする。こうなると、やっぱり自分で本をもつのをやめて、大学の方の充実を考え、その方をキチンと整理し、利用しやすいようにした方が本すじだという事になる。ほんの少数の座右の書は別として、本など個人がもつべきでなく、公共施設にまかせ、そちらの方は完全なドキュメンテーションのシステムをもって、いつでも個人の利用に応じられる。——そんな体制がつくられるべきだと思う。それをどううまくやるかが、これからの科学と文明の発展の一つのキイポイントのようにも思えてくる。

しかしそれは大変な事である。第1に文献の蓄積の驚異的な増加に対し、どう整理・収蔵していくかという問題、第2にその多量な蓄積を活用するシステムをどうつくるかという問題にぶつかる。

収蔵の問題は、書庫の増築よりも、将来はマイクロ化、容積の圧縮に向けられよう。その技術が進んで、米粒くらの所に何十冊もの本が整理されるようになるかもしれぬ。無論検索は自動化され、ボタンをおすと、所望の本の所望のページが開けられる、あるいは複写されるという事になるだろう。だが、利用の方はどうか。それだけ多くなった資料から自分の必要なものをみつけ出す、そのボタンを押すという学者・研究者とは、一体どんな人間だろうか？という思いが次にしてくる。

昔は万卷の書物を暗んじていたという大学者もいるが、大体はせいぜい数百冊の、時にはただ数冊の本を座右にして、学者は頭脳活動をしていた。その数冊、あるいは数百冊をえらび出したところに彼の学問があった——といえぬことはない。

とすれば、この利用のシステムの開発は、実は学問の本質にかかわる問題をふくんでいる。私は、司書といわれる人々の仕事の本当の内容が、現在どういうことになっているのか、よくは知らない。しかしこう考えてくると、それは多量の情報・資料の蓄積を資産として展開される将来の科学をいとなんでいくシステムの中で、いろいろシステムを創造し運営していくという役割をになっている、学者・研究者とまさるともおとらぬ全く新しい型の研究者でなければならないような気がする。

現在は実は金がなくてそれほど蔵書がふえることを心配しなくてもいい段階なのかもしれないが、大学の図書館はそういう大きな仕事の開拓に直面しているのではなからうか。

(工学部教授)

近畿地区農学系図書館懇談会発足

近畿地区国公立大学図書館協議会相互協力委員会は、さきに「大学図書館の相互協力活動」という報告書を出して、大学図書館間における相互協力は、いかにあるべきかを発表した。その手始めとして農学系図書館相互協力活動の組織作りを企図し、9月16日京都大学で会合を持った結果、近畿地区内において農学部を持つ全大学図書館（京大、京都府大、京都工芸繊維大、大阪府大、兵庫農大、滋賀短大、近畿大）を含めた「近畿地区農学系図書館懇談会」が発足した。

最近の科学技術の進歩はめざましく、またこれを発表する論文の数も年と共に幾何級数的に増加し、最低10年を見越して計画した各大学図書館の書庫掛をぼう然とさせている現状である。

殊に我が国においては、戦後各大学が戦争中の遅れを取り戻すべく、競って海外資料の導入に努めたため、ダブッタものはダブッタまま、無いものは無いままと、全く無謀に近いかたちで資料を導入して来たのである。

一方欧米では既に National Planning, Farmington Planning のごとく国としての取書計画を確立し、着々とその実を挙げつつある。近年経済の安定と、複写技術の発達も手伝い、我が国でもこのことに着目、相互協力の問題が大きく取り上げられて、特に主題別、分類別等質を同じくするものの結合の機運が高まってきた。このような時点で相互協力委員会の肝いりで「近畿地区農学系図書館懇談会」は発足し、今後の活動が大いに期待されている。

なおこの会の事務は当分の間京大農学部図書室が扱うことになった。

全学図書分類目録

谷口 寛一郎

250万冊の京大図書総合分類目録などできないし、また必要でないようにも言われるが、無いのが不思議に思われる。20年で復興した日本である、予算は伴うができると思う。「まず分類せよ、次に目録せよ」という言葉通り分類が先である。技術的に半数の図書は司書の手で図書を見ないでもできる、残りの半数は図書を見て、その残りは専門教官に教えていただく。すなわち部局から図書が本館に送られるまでに特にむづかしい図書の分類はNDCをどしどし展開もし、また訂正もして図書に書入れておいてもらう。部局には特殊な分類表を使用している向が多いがNDCとの関連を検討しておけば役に立つ。カードだけを分類排列するのであるから、その訂正は容易である。閲覧室用著者カードは事務用を兼用しむしろ解体して分類用で使用し、そのカード以前のものは昔の小型カードから簡単な1枚を作成する。1枚とは重複や続紙など不要、教室名も不要ということである。裁断せられ著者順または分類別に整理せられたLCカードを摘出してもよい。何分大量の図書なので分類は小目を必要とするが著者記号等一切不要である。和漢洋書を一連に排列する。どの分類にどんな図書があるかを知るだけで足りる。分類の原則を守り、整理の方針が定まれば、目録作成と同時に分類を入れる、主任司書は校閲者となり統一をはかることが肝要である。

私は昭和23年から文学部図書のNDCによる分類目録に着手したが、どの教官もむづかしい図書の分類について懇切に教えて下さった。今日では20数万枚に達していよう、参考資料になっているならば幸いである。

先輩の話になるが、当時は教室図書カードの裏面に本館の分類が書込まれ、他日に備えられた。しかし分類目録が実現しなかった事は分類は決して容易なもので無い事を物語っている。しかし私はフェニックスになっても50年先の新式京大図書館の一角に全学図書分類目録が備付けられているのを見たい。

「静修館」の額が火災の際学生の手により救出せられたことはありがたかった。すべてが貴重な文献である。その管理、整理と運用、いずれもそれぞれ別なむづかしさはあるが、私達は最善を尽して、後世に文化遺産として伝えたいものである。

—— 資料紹介 ——

○ 全日本出版物総目録（国立国会図書館編）昭和39年版

昭和39年度中に国内で刊行された出版物を収録したものである。「図書の部」と「逐次刊行物の部」に大別し、それらの中を官公庁発行のものと、一般発行のものに分けてある。後者は「日本十進分類法」の主網により、アルファベット順に排列しており、「地図」「楽譜」は別項とし、巻末に書名索引が付いている。ただ注意することはこの目録は刊行が1年余り遅れるので、それを補うため出版年鑑（出版ニュース社編）を併用すると便利である。本館には昭和23年度より所蔵している。

○ 全国公共図書館逐次刊行物総合目録（国立国会図書館編）第4巻 中国、四国編

これにより遠隔地の法令、新聞、雑誌、研究報告、年刊統計書、名簿、目録類等の所在を知り、地方誌等の資料の収集に役立てることが出来る。昭和38年度より5年計画で地方別に編集刊行中で第1巻近畿編、第2巻東海北陸編、第3巻関東編、第4巻中国、四国編まで刊行された。

○ 学術雑誌総合目録自然科学欧文編（文部省大学学術局編）1966年版

本誌 Vol 2, No. 5 で既報の本目録は関係方面の要望によりその収録範囲を主要大学、研究機関のみにとどめず全国の国公立研究機関をも含む大規模なものとするため、文部省は昭和35年度から3年計画で各編の増補改訂版を作成することとし、まず自然科学欧文編 1966年版が出版された。以上の目録は参考室に備付けてあるから利用されたい。

○ 東海道幹線工事誌（東京幹線工事局編）

東京一大阪間515軒を5年半で完成、国鉄の総力を挙げて竣工した工事報告書である。一般編、土木編、電気編の3分冊になっており、他に静岡幹線工事局編も一緒に寄贈された。専門家にとっても良き研究資料となるであろう。

学内図書の相互利用を中心に

—誌上討論—

大学図書館間の相互協力が提唱され、一部実行に移されている時代に、同じキャンパスにある部局の図書の相互利用が、円滑に行なわれていないのは奇妙なことである。先ごろ部局図書掛長の会合でも、この相互利用について種々論議され、また本誌前号の寄稿においても、期せずして学内図書の有効な利用が要望されていた。この際現場の図書館員としてもこの問題をどう考えているか、誌上討論の形で意見をよせて頂いた。

相互利用をはばむものは何か

A 我々図書職員は研究の援助として、図書資料を収集し、整理し、研究者にすみやかに提供すべく不断の努力を続けている。研究者が要求している図書資料が、他の学部にある場合にそれを利用することが簡易にできないのが現状である。何故かといえば貸出規程が各学部ごとにまちまちであること、また各学部の図書資料はその学部割り当てられた予算で購入されたものであるから、他学部の研究者、学生に利用させることは、その学部の研究者が喜ばないという面もあり、それが相互利用を困難にしている。

B 相互利用を困難にしている原因の一つとして、利用者側にも問題がある。本館の現状をいえば、借用者の半数近くは期限までに返却せず、第1回の督促状により未返却者の半数がやっと返却するにすぎない。5回以上の督促や電話連絡もたびたびであり、毎月督促状を150枚も書かねばならず、無駄な労力に掛員が泣かされている有様である。

C 在籍者の学外転出に対しては、自学部生には卒業証書と引換えに借用図書の返還を義務づけることができるが、他学部生に関してはその異動の通告がなくて動静がつかめず宛先不明で返送さ

れてくる督促状や、督促しても梨のつぶての場合もあり、せっかく便宜をはかってもこちらが大変迷惑する。各教務掛と図書室との密接な連絡が必要だ。これなくしては徹底した管理は困難である。

どうすれば相互利用は円滑に行なわれるか

A 貸出手続または利用規程の不統一に問題があると思う。この規程を一本化すれば相互利用が可能であると考えられる。付属図書館が主体となり、本学共通の規程を作成されたい。

しかし一挙に本学共通の規則を作って、相互利用にふみきるといっても、種々具体的な問題が生じる。この問題の具体的解決案としてまず考えられるのは、各部局の図書利用規則の付則として、「他の学部、研究所の教官 および 学生も、所定の手続のもとに利用することができる。」という一項を設けたならば、相互利用も案外可能なのではないか。

D 付属図書館へ申し込めば、どの部局の図書も利用できるというように、付属図書館が図書貸借の窓口となつてはどうか。

E 本館では法・経両学部には学生閲覧室がないため、その閲覧事務を代行しているが、これは特殊事情によるものであって、すべての部局におよぼすことは、距離の点、時間の点、部局図書室の受付体制その他を考慮しなければならないが、その点どのように考えればよいのだろうか。将来の理想像としては、学内に人文科学系、社会科学系、自然科学系、医学系の専門図書館を設け、図書も建物も組織も統合すれば、相互利用、収書の合理化、情報活動、人手の問題も解決に近づくと思われるが――。

A 貸出された図書資料は用済み次第すみやかにこれを回収せねばならぬ。そのためには利用者の自覚の念と、各部局の教務掛あるいは庶務掛との横の連絡を必要とする。そうでなければ円滑な図書資料の運営は望めない。

C そこで一つ提案したいのは、学報のような形式で、月刊または学期刊で転籍・転職予定者の

情報を、中央図書館で総括して各図書室へ流してはどうであろう。他方、部外貸出圖書の責任はもちろん借出者個人が負うべきだが、同時に研究奉仕機関という役割上、各図書室はその借出責任を持つべきではないだろうか。そのためには常にどの研究者、学生がどこの図書を利用しているかを知っておかねばならない。潤滑油としての中央図書館の働きを期待したい。

学問研究の進展のために

F 最近全学で購入される資料（特に洋雑誌）には複本が非常に多い。同一学部内に数部、時には十数部の複本があるのは、実際に利用ひん度が高くても必要なこともあろうが、中には教室間の横の連絡なく購入することが原因の一つになっていることもあろう。相互利用を活発に行ない、もっと横のつながりを強めてあまり利用ひん度の高くない複本の購入を避け、他の重要な図書にふりむければ、予算面でも無駄が省け一石二鳥と思う。

D 私のところの場合、付属図書館のカードを検索しての利用者も多いのであるが、閲覧室の図書も、学生の利用がほとんど不可能な教官研究室の図書も、付属図書館のカードには区別がされていないので、利用者にも迷惑をかけているようだから、その区別を明りようにしてもらいたい。

E 付属図書館では中央館として、早くから全学総合目録を備え付けているが、これは図書が1部局・1研究室のみの利用にとどまらず、広く全学的に利用されることを予想して作られたものである。この目録には不備な点もあるが、これを検索して得た図書が利用できないのでは、何のため

の総合目録かと利用者は疑問と失望を覚えるであろう。館員としても苦心の目録の利用価値が半減するようなことは不本意であるし、利用者たる学生の失望を見るに忍びない。

京都大学付属図書館報告書中の「図書の専用化傾向」の項にも「図書館の蔵書は原則としてその利用が公開されるところに価値がある」とし、部局における図書の専用化の実状を究明し、「図書の専用化傾向は、総合研究の高まりと矛盾するものであって、この傾向の進行をそのまま是認し続けるならば、やがてそれは大学における研究の進歩に障害となるであろうことを恐れる」と述べられている。

G 本川東北大学総長も同様の図書館通信に1文をよせて「日本の大学の図書館の在り方は従来の考え方の影響もあって、未だ充分近代化の姿になっていない」とて、教授の個人蔵書的な考え方や、教室毎に利用の道が閉ざされて、結局ほしいものは自分で買わねばならず、図書費がかさんだこと、しかし個人で買う図書ぐらいで本当のよい研究はできないことなどあげられ、「今はそうしたことは少なくなりつつあるが、図書館の運営・利用においては封建性は敵である」と断言されている。

大学が研究と教育の場である以上、利用者も節度を守り、図書が特定の人だけのものに終わらないことを願ってやまない。

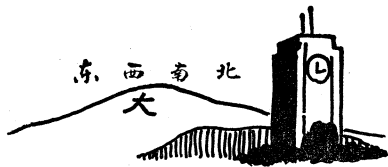
参加者 奥山哲（教育）・竹中千恵子（法）・北村明美ほか（教養）・本館編集委員

（この他の方からも図書館のあり方について御意見を頂いたが、紙面の都合で次に割愛させて頂いた。おゆるしをこう。）

学生に対する
図書開放状況
(昭和40年調査)

	関	貸		関	貸		関	貸		関	貸		関	貸
図	○	○	教	○	●	電	○	○	化	○	●	数	○	●
文	●	●	養	○	●	気	○	○	工	○	●	学	○	○
教	○	○	人	○	●	土	○	○	高	○	○	物	○	○
育	○	○	文	○	●	木	○	○	分	○	○	理	○	○
法	○	○	研	○	○	機	○	○	子	○	○	宇	○	○
経	○	○	結	○	○	械	○	○	航	○	○	宙	○	○
医	○	○	研	○	○	資	○	○	空	○	○	地	○	○
薬	○	○	食	○	○	源	○	○	原	○	○	球	○	○
農	○	○	研	○	○	冶	○	○	子	○	○	化	○	○
	○	○	基	○	○	金	○	○	核	○	○	学	○	○
	○	○	物	○	○	工	○	○	衛	○	○	物	○	○
	○	○	数	○	○	化	○	○	生	○	○	動	○	○
	○	○	研	○	○	建	○	○	工	○	○	植	○	○
	○	○		○	○	築	○	○	数	○	○	物	○	○
	○	○		○	○	石	○	○	理	○	○	地	○	○
	○	○		○	○	油	○	○	工	○	○	鉦	○	○
	○	○		○	○	化	○	○	合	○	○		○	○

○ 全学学生が利用できる ○ 他学部学生は利用できない ● 全学学生が利用できない
(紹介を要するなど条件付のものではないものに記入した。遠隔部局は省略)



法学部図書室

明治32年9月、京都帝国大学法科大学開設、爾来約70年の歴史は現在の講座数33、創設以来の資料の蓄積は、32万冊余を数えるに至った。その蔵書構成は、法律・政治学の全分野にわたって、その資料的価値は屈指のものといわれてきた。しかも同時に次の二つの大きな特色を図書室に残してきた。

その第1は、書庫設計に当って、現在では常識となっている積層方式をすでに大正年間採用したことである。今でも学内の多くの図書室ではしごを使用している不便さを見るにつけ、これは当時としてはすばらしい着想であった。第2は図書目録の分野である。研究者と増加してゆくぼう大な資料の接点を図書目録の充実に向け研究者の利便を考えた。大正2年から昭和10年にわたって刊行された Katalog der Fremdsprachigen Bücher in der Bibliothek der Juristischen Fakultät und der Wirtschaftswissenschaftlichen Fakultät der Kaiserlichen Universität zu Kyoto. はさん然と輝いている。その遺産に対していくたの利用者から今でも賛辞を惜しまれていないのである。一方、蔵書目録作成をてがけてきた図書館員の中から著名な目録学者が輩出した。

以上のような伝統をうけついできた図書室も現在の時点にたてば次のような問題が

ある。

はじめに、書庫の管理と運営である。関係者の異常な努力の結果にもかかわらず、書庫の満腹状態から脱却しきることができなかった。やむをえずうたれてきた手は、管理する人員の伴なわない資料の分散であり、すでに約10ヶ所にもおよんでいるのである。この事実をいかに解決してゆくか。

地階書庫、ここには約20万冊の図書が収蔵されているが、資料の保存のためには最悪の条件が揃っている。窓は錆ついて開かず、冬は冷えきっていて、その反対に夏はむれて、しばらく入っていると気分が悪くなりそうである。せめて除湿器でもという声が最近でできたのがせめてもの救いの道である。歴代の図書館員の、研究者のための利用し易い快適な書庫建設への願望のむなしい声が地下道の奥から聞こえてくるようである。

研究図書館として、教官の教授・研究活動への奉仕を根底として、その一つに新着洋書雑誌の一部にコンテンツ・シート・サーヴィスを昨年開始した。現人員（定員11名、非常勤2名）では、十分なサーヴィスを行ない難いが、今後、参考業務を研究者の期待にこたえてどのような展望をもって進めてゆくかが大きな課題である。学部学生に対しては、まず学部独自の学生閲覧室をもつべきこと、これも大きな問題点である。

大学の使命、教育と研究の場を支える土台の一つは図書館の充実である。今、もしその新築が考えられるならば、部局図書室の使命の上にならなくて、資料の良好な管理を基礎にした、研究者への奉仕形態をさまざまな角度から考えねばならないのではないだろうか。

古記録展

と き 10月26日～28日

ところ 附属図書館陳列室

万里小路時房自筆の「建内記」等、
菊亭家寄託の古記録、およびその他の
古記録類を陳列。

あ と が き

▶読書週間にこの号をお届けできることを、大変うれしく思います。

▶秋になると例年のことながら、図書館の利用者が大幅に増え、私達も日々の仕事に張り合いを覚える今日この頃です。

今回は学生の寄稿を休み、各学部図書室の方々の卒直な発言をいただき、誌上討論を試みました。ご意見、ご感想をお寄せ下されば幸いです。